第三八回研究発表会発表要旨

強調表現「すごい」の歴史的変遷について

山本一暢

若者言葉という言葉がテレビや雑誌で頻繁に言われているが、年齢の若い人たちが使う言葉が、既存の日本語に則って考えると「意味がわからない」、「本来の使い方と違う使い方で使っている」という事が度々問題とされている。だが、古文で使われる日本語と現在私たちが使っている日本語は、同じ点もあるが、異なる点も多々ある。そこで、どの様に古文で使われていた日本語が現在私たちの使っている日本語に変化していったのか調査、考察し、日本語の意味や用法の変遷について考察した。

古典に使われている用例と訳は『新編日本古典文学全集』から「すごし」とその派生語である「すごげなり」の二語を調査し、意味の違いや用法が時代を経るにつれてどのように変化していくか、比較する。現代語の「すごい」は『週刊エコノミスト』から抜粋し、古典と同じように意味や用法を分類し、古典語の「すごし」と同じところ、違うところを挙げ考察する。『新編日本古典文学全集』と『週刊エコノミスト』の文章はジャパンナレッジから引用し、近代の文学作品については『青空文庫』を用いて調査した。

「すごい」は中古でよく使われていた意味と現代でよく使われている意味が異なり、現代でかなり使われている語なので、意味が完全に変化したのは、中世後半～近世辺りで、変化してから長く使われていたのだろうと思っていたが、実際は、近代になって、数を増しており、まだ「ぞっとする」という意味も使われていた。現代と全く同じ使い方をするようになったのは、最近のことであった。

言葉の意味変化は、陳尚・吉田則夫が、『「ヤ（病）ム」とその派生語の語史―「ウラヤム」「ココロヤム」など―』で「類似の語構成を有する「ウラヤム」「ココロヤム」が、異なる意味、使用範囲を見せるのは、それらが初出当時の文体や共起表現に大きく左右されたためと考えられる。時代変遷の過程で、明確な意味領域を獲得した語は安定して使用されるが、獲得できなかったものは生命力を失い衰退してしまうのである。」と言っているが、「すごし」の場合は、中古から近代まで使われていた意味が現代では衰退している。中古から近代まで使われ続けていたということは、明確な意味領域を獲得していたという事になるのであろう。

陳崗・吉田則夫は『心情形容詞の歴史的研究―「ねたし」について―』で「中世の「ねたし」には、平安時代に広がった意味での使用例が見られないことから、その意味範囲を狭めていったのではないかと考えられる。また、意味を狭めながらも、その一方では、相手の恵まれた状態にあこがれるようなニュアンスを持つような例が出現し始める。」と言っている。ある程度使われていた言葉でも、意味範囲を狭めることがあるようだ。「すごい」も、近代まで使われていた意味が現代になると使用例が見られず、その一方で、程度が甚だしいという強調の意味領域を強くしていった。

近代までの「すごい」は「おそろしい」や「さびしい」といった「すごし」を現代語訳した場合、ほぼ同じ意味になる言葉と使い分けをしていた。

これらの単語の意味を『日本国語大辞典第二版』で比較してみると「すごし」が「ぞっとするほど恐ろしい。気味が悪い。鬼気迫るようである。」「ぞっとするほどさびしい。荒涼とした感じで背筋が寒くなるほどである。」という意味なのに対し「おそろし」は「身に危険が感じられて、不気味である、不安である。こわい。おっかない。」となり、「さびし」は「（1）本来あるべき状態になく、また、本来備わっているはずのものが欠けていて、満たされない気持を表わす。物足りない。不満足、不景気、憂鬱、物悲しさなどを表わす。さぶし。さみしい。」「（2）人の気配がなく心細い。ひっそりしている。静かで心細いほどである。また、人が住まずに荒れている。さみしい。」となっていることからも、「すごし」がただ単に「おそろしい」「さびしい」という意味で使われるのではなく、「ぞっとするほど」「気味が悪い」「背筋が寒くなるほど」という意味が追加されている分、「おそろし」や「さびし」だけでは伝わらない意味合いがあることがわかる。この、微妙な意味の違いを近代までは使い分けていたのだろう。

しかし、現代の若者に「霧雨」と「小雨」と「こぬか雨」の違いを区別できる者が少ないように、近代から現代にかけて、「すごい」にある「ぞっとする程」という微妙なニュアンスを区別することができなくなったのではないだろうか。その結果、「すごい」の「ぞっとする程」という意味は生命力を失い、「おそろしい」や「さびしい」という単語に取って代わられたのではないか。これは、「おそろしい」に「おそろしく美しい景色」「恐ろしく不味いご飯」という、「すごし」の「（3）ぞっとするほど美しい。戦慄を感じさせるようなすばらしい風情である。（4）あまりにその程度がはなはだしくて、人に舌をまかせるほどである。」と同じような意味があることからもうかがうことができる。

「すごし」特有の「ぞっとする程」という意味が現代の「すごい」には薄く、「おそろしい」「さみしい」という意味が完全に消失していることからも、中古～近代まで主流だった「すごし」の意味は「おそろしい」「さみしい」に吸収され、「程度が甚だしい」という意味だけが残り、現代の「すごい」になったのであろう。

（やまもと・かずのぶ）